「働くことと科学技術に関連する諸現象」を探究
就業の場に科学技術が導入されることによる諸現象と、科学技術を生み出す人々の指向や働き方について考える

現代社会における働き方を科学技術との関係から捉える時、就業環境に導入される科学技術が私たちの働き方に及ぼす影響について考える必要があろう。また、日本は激しい国際競争の中にあり、経済的合理性の論理に迫られて多くの研究開発がなされている。科学技術の研究開発現場には成果物による社会的な影響について想像力を巡らす時間が充分に与えられているだろうか。働き方と科学技術研究センターでは、科学技術が働き方に及ぼす影響、成果を生み出す専門職（研究者・技術者等）自身の就業環境、彼らの科学的指向と個人や組織における規範や制度、組織構造や社会構造との関係、雇用を生み出す長寿企業（老舗）への科学技術的支援の歴史といった多角的な視点から調査・研究を行っている。本研究センターは、新たな中核的研究拠点として、これらの視点から研究成果を発信し、この活動を通じて国際研究交流を推進することを目的としている。

働き方と科学技術研究センター
センター長 **藤本 昌代**
【社会学部社会学科教授】

2001年 同志社大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了（博士（社会学））。機械制御系ソフトのシステム設計に約10年間従事した時にエンジニアに関心を抱いたのが、現在の研究に打ち込む契機となる。大学時代はテニス選手として活躍（全日本、国体出場）し、当時は日本テニス協会公認指導員の資格を有していた。オフタイムはスイミング、哲学の道の早朝散策などでリフレッシュを図っている。

働くことと科学技術の関わりを複合的に捉える

働き方と科学技術研究センターでは、現代社会で見落とされがちな「働く場と科学技術」に関わる諸現象を探究している。人々が科学技術に対し、過剰に親和性を高めることは社会の構造や雇用制度、個人や組織の規範にも大きな影響を及ぼし、成果を追求することに埋没する研究開発者には予測できない危険性が潜んでいると藤本昌代センター長は指摘する。本研究センターの1つめのテーマは「働くことへの科学技術の関わり」について、新たな科学技術を職場に導入した時に生じる働き方、職場の人間関係、規範、制度などの変化などを研究することである。また職場だけでなく、インターネットが普及しても在宅勤務が普及しなかったことについて、ジェンダー・バイアス、セキュリティ、プライベートな時間への労働時間の侵食、対面コミュニケーションの減少による情報の限定性等々、多様な問題が潜んでいる。他にも地域間格差がなくなると謳った通信系の研究テーマが多く採択されているにもかかわらず、東京一極集中が続いている。私たちは技術では解決できない問題を考えていく必要がある。

科学的な指向が生み出す課題

2つめの研究テーマは「科学的な態度・指向が生み出す社会的課題」である。「科学技術系の研究開発は社会の発展に役立つと思われがちです。現在よりも未来が良くなるという直線的な進化を信じる発想です。しかし、本当にそうなのでしょうか。その中には想定外の弊害を及ぼす危険性を孕んでいるものがあることを私たちは過去に多くの例を見てきています」。経済的合理性に追い立てられて熟考されずに進められていく企業活動や政策について問題点を議論する場が必要であり、大学はそのような場を提供することができる。

労働者として研究開発に従事する専門職への視点

3つめの研究テーマは「科学技術を生み出す側の人々の意識と労働環境」である。科学技術に関する研究開発では激しい国際競争が行われる中で、それに携わる人々は成果を挙げることに追われ続けている。過重労働の問題はあらゆる分野で発生しており、専門職の就業環境も深刻である。一般的な労働者への過重労働に注目が集まりがちであるが、専門職や中高年層の管理職への重圧は大きく、深夜まで及ぶ長時間労働が恒常化している。切迫した状況に専門職や管理職が長時間置かれていることが様々な社会問題を生み出す要因になっている。これは組織での意思決定における構造上の問題や企業の社会的責任にも直結する問題である。

長寿企業（老舗）への科学技術支援の歴史

また、京都は伝統文化と革新によって長年栄えてきた歴史があり、老舗は伝統文化の継承者としてだけでなく、長寿企業として雇用創出の役割を担ってきた。京都で100年以上続く中小企業は、それぞれの時代の最先端の技術によって生き延びてきた歴史をもつ所が多い。研究所を持たない中小企業と公的研究機関の関係は長い歴史が存在する（現在、京都市の協力を得て、学生と共に研究を行っている）。

クリティカルな視点醸成と問題提起

「私たちは、いかに科学技術を役立たせるかという科学技術を妄信する指向、また反対に科学技術を一方的に否定する態度だけでなく、科学技術とどのように関わることが望ましいのかというクリティカルな態度を持つことが重要だと思います。これからの時代を生きる上で、そのような態度をもって科学技術と共存することが求められると思います。クリティカルな視点の醸成と問題提起に役立てられる研究成果を発信していければと考えています」。本研究センターでは、これらの多岐にわたるテーマに経験豊富な研究員や若手研究員が、定量的な分析によるマクロな研究と、定性的な分析によるミクロな研究に取り組んでいる。その研究成果を国内外に発信することによって社会に貢献する中核的研究拠点の確立を目指している。

積極的に国際研究交流を推進

国際研究交流も本研究センターの重要な設置目的である。現在、社会科学の分野で世界的に著名な研究者を輩出しているフランス国立社会科学高等研究院（EHESS）、南フランスの産業集積地にあり、労働関係の研究で名高いフランス国立労働経済学・労働社会学研究所（LEST）、キャリアなどの調査・研究で巨大なデータベースを構築しているフランス国立資格調査研究センター（CEREQ）との共同研究を実施中である。さらに、欧州の近隣諸国の研究機関への道筋も拓くべく、計画中である。「このような国際研究交流は、若手の研究員が第一線で活躍し始めた時に貴重な人脈として役立つはずです。研究促進と共に後進の育成も本研究センターの役割であり、できる限りのサポートをしたいと思っています」。2023年3月(設置期間)に向けて際立つ研究成果が期待されている。